








病害虫発生予察情報予報第 7 号 (10 月の予報)

佐賀県農業技術防除センター

I. 予報の概要および各作物の特記事項

作物名	病害虫名 ^{注1)}	10月の予想発生量 ^{注2)} (平年比)	予報対象の病害虫 (抜粋)
水稲 (普通期)	トビイロウンカ	並	
	1. トビイロウンカ 県内の一部の圃場で、坪枯れの被害が確認されている。また、気象予報では今後も気温が高いと予想されており、ウンカ類の発生に好適な条件となっている。今後の被害拡大を防ぐため、必ず圃場ごとの発生状況を確認し、寄生密度が高い場合は早急に薬剤防除を実施する。		
大豆	ハスモンヨトウ	多	 カメムシ類
	カメムシ類	やや多	
	1. チョウ目害虫 (ハスモンヨトウ、シロイチモジヨトウ等) 一部の圃場でハスモンヨトウの寄生や白変葉の発生が多い。また、トラップ調査では、ハスモンヨトウおよびシロイチモジヨトウの誘殺数が増加していることから、圃場ごとの発生状況を確認し、幼虫の寄生が多いまたは加害が続いている圃場では防除を実施する。 2. カメムシ類 被害を防ぐため、圃場ごとの発生状況や大豆の生育状況を確認し、莢の伸長初期～子実肥大中期に防除を徹底する。発生が多い圃場では、7～10 日間隔で 2～3 回防除を行う。		
イチゴ (本圃)	ハダニ類	やや多	 ハダニ類
	うどんこ病	やや少	
	アブラムシ類	並	
	1. 炭疽病 天井ビニル被覆時まで本病に対する薬剤防除を継続する (令和 5 年 9 月 12 日付け病害虫対策資料第 9 号参照)。 2. ハダニ類 薬剤防除の際は、下葉や葉裏まで薬液が付着するように十分量を丁寧に散布する。また、天敵を利用する圃場では、天敵への影響が少ない薬剤を用いてハダニの密度を 0 頭レベルに抑えた後に、天敵 (カブリダニ類) を放飼する (令和 5 年 9 月 12 日付け病害虫対策資料第 9 号参照)。 3. 次年度産親株の病害虫対策 本年は、育苗期に炭疽病の発生が多かった。次年度作での炭疽病、萎黄病等の発生を抑えるため、健全親株を確保する。特に、育苗期に発生が認められた圃場では優良原種苗等への更新を行う。		

作物名	病虫害名 ^{注1)}	10月の予想発生量 ^{注2)} (平年比)	予報対象の病虫害 (抜粋)
キュウリ	べと病	やや少	 退緑黄化病
	うどんこ病	やや少	
	褐斑病	並	
	アザミウマ類	やや多	
	コナジラミ類	多	
1. タバココナジラミ：退緑黄化病、ミナミキイロアザミウマ：黄化えそ病 コナジラミ類の発生が多い。ウイルス媒介虫の侵入防止対策を徹底するとともに、定期的に薬剤防除を実施する。ウイルス病罹病株を認めた場合は、早急に圃場外に持ち出し、適切に処分する（令和5年9月11日付け病虫害対策資料第8号参照）。			
アスパラガス	ハダニ類	やや多	 ハダニ類
	アザミウマ類	並	
	褐斑病	やや多	
	茎枯病	やや少	
	斑点病	やや少	
1. 次作に向けた対策 病虫害による早期落葉と次作への持ち越しを防止するため、収穫終了後も定期的に防除を行い、病原菌および害虫の密度の抑制に努める。			
タマネギ	1. べと病 苗床での感染を防ぐため、育苗期から予防防除を行う。		
野菜共通	チョウ目害虫 (ハスモンヨトウ、 オオタバコガ、 シロイチモジヨトウ)	多	 シロイチモジ ヨトウ
	1. チョウ目害虫 シロイチモジヨトウのフェロモントラップへの誘殺数が平年より多い。圃場毎の発生状況を確認し、本虫の若齢幼虫期の防除を徹底する。		
果樹全般	果樹カメムシ類	多	 ツヤアオ カメムシ
	1. 果樹カメムシ類 発生量や飛来状況は地域や園によって異なるため、園内外をよく観察し、飛来が確認された場合には、直ちに防除を行う（詳細は令和5年9月12日付け病虫害発生予察注意報第1号を参照）。 ツヤアオカメムシは常緑樹の樹上で越冬する習性があり、カンキツ類の樹上でも越冬する。本虫が越冬のために飛来したカンキツ樹に果実が結実している場合は、果実を収穫するまで被害を受けることになるので、寄生状況に注意する。		

作物名	病虫害名 ^{注1)}	10月の予想発生量 ^{注2)} (平年比)	予報対象の病虫害 (抜粋)
カンキツ	ミカンハダニ	やや多	
	チャノキイロアザミウマ	並	
	1. 果実腐敗対策 日焼け果や裂果は、果実腐敗の原因となるので、収穫時に取り除き処分する。また、降雨時・結露時の収穫は避けるとともに、果実に傷をつけないよう丁寧に扱う。腐敗防止の薬剤は、収穫7～10日前に、霧状になるノズルを使ってムラがないように散布する。 2. かいよう病 台風の襲来等強風雨が予想される場合は、襲来7日前～前日までに必ず薬剤散布を行う。また、罹病しやすい品種では、感染防止のため園内の発病葉および発病果実を切除し、埋却または園外に持ち出し処分する。 3. ミカンサビダニ 園内及び周辺の園で新たな被害を認めた場合は、早急に薬剤を散布する。特に、前年に被害が多発した園や放任園等に隣接する園では防除を徹底する。		
ナシ	1. 黒星病 翌年の伝染源を減らすため、収穫終了後の防除を徹底する。落葉した罹病葉は本病の伝染源となるので、埋却または園外に持ち出し処分する。		
ブドウ	1. ペと病 本病による早期落葉の防止及び園内の菌密度低下のため、収穫終了後の防除を徹底する。落葉した葉は本病の伝染源となるので、埋却または園外に持ち出し処分する。		
キウイフルーツ	1. かいよう病 収穫期頃から、本病菌の増殖に好適な気温となる。感染を防止するため、発病の有無にかかわらず、全ての園において、収穫終了直後から銅水和剤による定期的な防除を実施する。		
キク	白さび病	並	 <p>チョウ目害虫によるキクの被害</p>
	アザミウマ類	やや少	
	アブラムシ類	並	
	ハダニ類	並	
	ハモグリバエ類	並	
	チョウ目害虫	多	

注1) 病虫害名に網掛けをしたものについては、予報の根拠とした内容を記載しています。

注2) 予想発生量については、平年との比較により記載しているため、実際の発生量とは相違を生じる場合があります。例えば、例年の発生量が少ない病虫害について「平年より多い」と予想した場合であっても、実際の発生量は多くない場合があります。

注3) 防除対策については「佐賀県病虫害防除のてびき」も参照してください。

佐賀県病虫害防除のてびき掲載アドレス

https://www.pref.saga.lg.jp/ki_ji00321928/index.html

QRコード→



II. 予報の内容・根拠等について

予報内容（来月の予想発生量）

- 平年（過去 10 年間）と比較し「少、やや少、並、やや多、多」の 5 段階で示しています。
なお、少発生が予想される病害虫等については、予報の概要のみの記載となる場合があります。

予報内容の根拠

- 農業技術防除センターが実施する県内各地での調査、防除員の調査、予察灯・トラップでの誘殺状況調査等に基づく発生現況、気象予報からみた病害虫の発生条件等を基に、関係者による発生予察会議で決定します。
○ 発生現況および気象条件が来月の病害虫の発生に及ぼす影響については、(－)：少発生、(－～±)：やや少発生、(±)：並発生、(±～＋)：やや多発生、(＋)：多発生として示しています。

防除上注意すべき事項

- 各病害虫を防除する上で特に注意すべき事項等を記載しています。なお、全般的な防除対策については「県防除のてびき」をご参照ください（4 ページの注釈にリンクが有ります）。

写真

- 1～3 ページ目：予報で対象とした病害虫を抜粋して掲載しています。
5 ページ目以降：定期調査時の各作物の生育状況を掲載しています。

10 月の気象条件

- 病害虫の発生に関与する 10 月の気象条件については、福岡管区気象台発表の 1 ヶ月予報（令和 5 年 9 月 21 日）を基に、「気温：平年より高い」、「降水量：平年よりやや少ない」と判断しています。

気象予報による要素別確率(%) 及び病害虫の発生に関与する気象条件

要素	1 ヶ月予報における 10 月の気象予報（確率予報%）			病害虫の発生に関与する気象条件（平年比）
	低い(少ない)	平年並 (佐賀市の平年値)	高い(多い)	
気温	10	20 (19.1℃)	70	高い
降水量	40	40 (90.1 mm)	20	やや少ない

Ⅲ. 10月の予報

水稻（普通期）

[【概要に戻る】](#)

定期調査：48 圃場
調査日：9月13日～20日



定期調査圃場の様子（普通期水稻）

1. トビイロウンカ

- 1) 予報の内容
発生量：平年並
- 2) 予報の根拠
 - (1) 発生状況
 - ①定期調査(図1参照)
発生株率 0% (平年 17.2%、前年 9.9%)
平年比：やや少〈-〜±〉
 - (2)10月の気象予報
気温は高く、多発生の条件〈+〉
 - 3) 防除上注意すべき事項
 - (1)特記事項を参照。

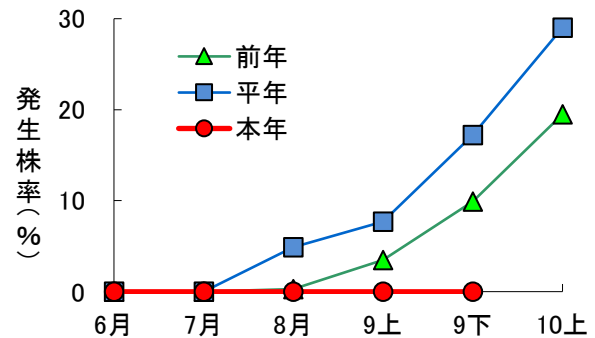


図1 普通期水稻でのトビイロウンカの発生推移

大豆

[【概要に戻る】](#)

定期調査：22 圃場
調査日：9月13～20日



定期調査圃場の様子（大豆）

1. ハスモンヨトウ

- 1) 予報の内容
発生量：平年より多い
- 2) 予報の根拠
 - (1) 発生の現況
 - ①定期調査(図1参照)
発生株率 4.2% (平年 4.9%、前年 1.2%)
平年比：並〈±〉
白変葉発生株率 4.0% (平年 1.0%、前年 0.4%)
平年比：多〈+〉
 - ②トラップ調査(図2参照)【県内8地点】
平年比：多〈+〉
 - (2)10月の気象予報
気温は高く、多発生の条件〈+〉
- 3) 防除上注意すべき事項
 - (1) 各圃場での発生状況を確認し、白変葉が散見され始めたら防除を実施する。
 - (2) 防除の際は、薬剤のかけむらがないよう規定の範囲で十分量を散布する。
 - (3) その他については、特記事項を参照する。

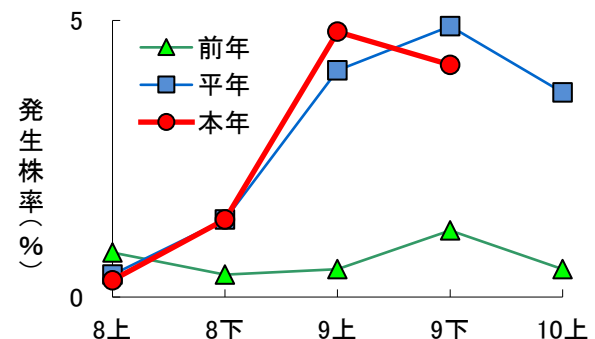


図1 大豆でのハスモンヨトウの発生推移

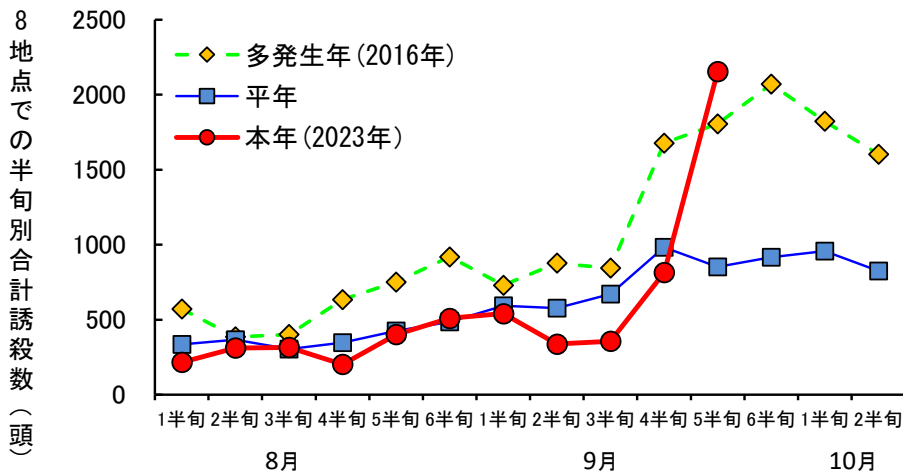


図2 フェロモントラップによるハスモンヨトウ雄成虫の半旬別誘殺数(9月5半旬まで)
(農業共済組合、農業試験研究センター調査による県内8地点の平均誘殺数)

2. カメムシ類 (アオカメムシ, 仔モンゾカメムシ, ホハリカメムシ, ミミアカメシ等)

1) 予報の内容

発生量: 平年よりやや多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査 (図1 参照)

発生株率 0.3% (平年 0.2%、前年 0.2%)

平年比: 並 (±)

(2) 10月の気象予報

気温は高く、多発生の条件 (+)

3) 防除上注意すべき事項

(1) 防除にあたっては、薬剤が莢によくかかるように散布する。

(2) その他については、特記事項を参照する。

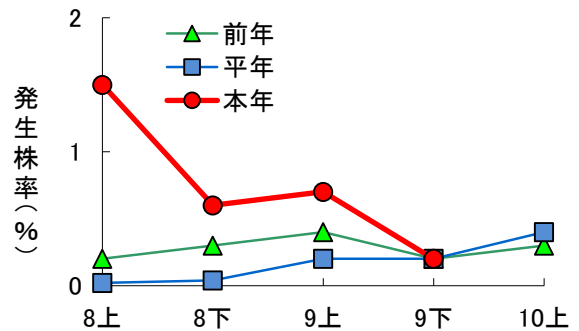


図1 大豆でのカメムシ類の発生推移

イチゴ (本圃)

[【概要に戻る】](#)

定期調査 10 圃場、防除員 6 圃場

調査日: 9月13~25日



定期調査圃場の様子

1. ハダニ類

1) 予報の内容

発生量: 平年よりやや多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査 (図1 参照)

発生株率: 3.3% (平年 6.3%、前年 3.5%)

平年比: やや少 (-~±)

(2) 10月の気象予報

気温が高く、多発生の条件 (+)

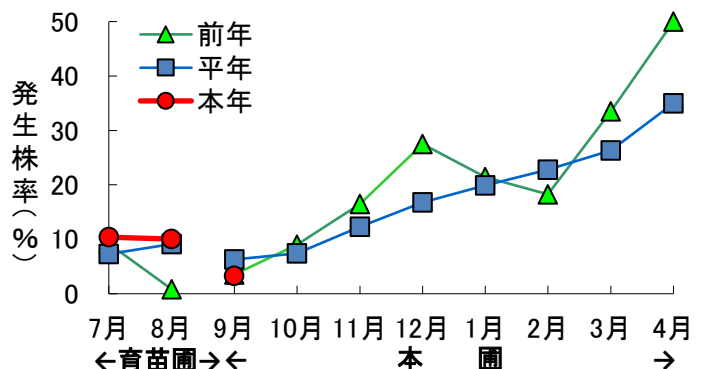


図1 ハダニ類のイチゴでの発生推移

3) 防除上注意すべき事項

(1) 特記事項を参照。

2. うどんこ病

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少ない

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査 (図1 参照)

発生株率：0% (平年 1.5%、前年 0%)

平年比：やや少 (一～±)

(2) 10月の気象予報

降水量はやや少なく、やや少発生の条件 (一～±)

3) 防除上注意すべき事項

(1) 果実での発生を防ぐため、頂果房開花前までの防除を徹底する。

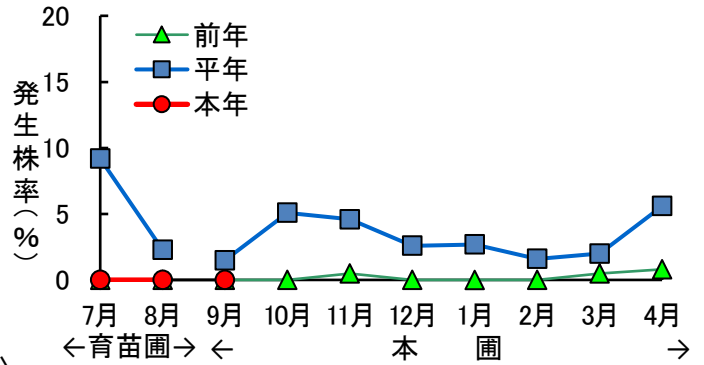


図1 イチゴうどんこ病の発生推移

キュウリ

[【概要に戻る】](#)

定期調査 4 圃場、防除員 4 圃場

調査日：9月16～22日



定期調査圃場の様子

1. ベと病

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少ない

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査 (図1参照)

発生株率：0.6% (平年5.3%、前年1.1%)

平年比：やや少 (一～±)

(2) 10月の気象予報

降水量はやや少なく、やや少発生の条件 (一～±)

3) 防除上注意すべき事項

(1) 適正な湿度管理に努める。

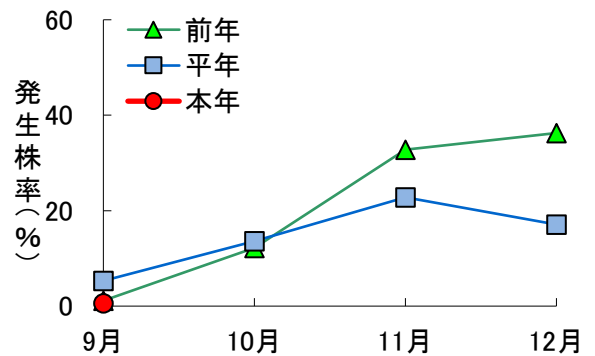


図1 キュウリベと病の発生推移

2. アザミウマ類

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査 (図1 参照)

発生株率：2.5% (平年 1.8%、前年 0.6%)

平年比：並 (±)

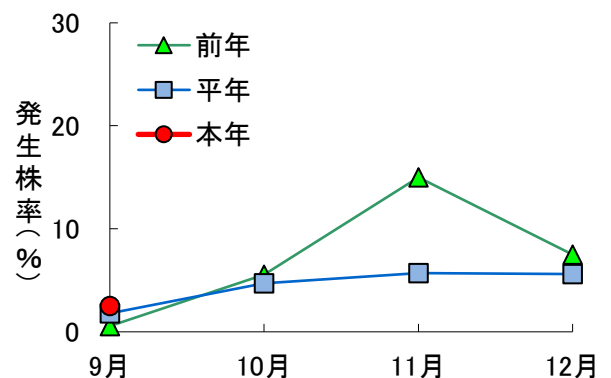


図1 アザミウマ類のキュウリでの発生推移

(2)10月の気象予報
気温は高く、多発生の条件〈+〉

3) 防除上注意すべき事項
(1)特記事項を参照。

3. コナジラミ類

1) 予報の内容
発生量：平年より多い

2) 予報の根拠

(1)発生の現況

①定期調査(図1参照)

発生株率：15.6% (平年6.2%、前年17.2%)
平年比：多〈+〉

(2)10月の気象予報

気温は高く、多発生の条件〈+〉

3) 防除上注意すべき事項
(1)特記事項を参照。

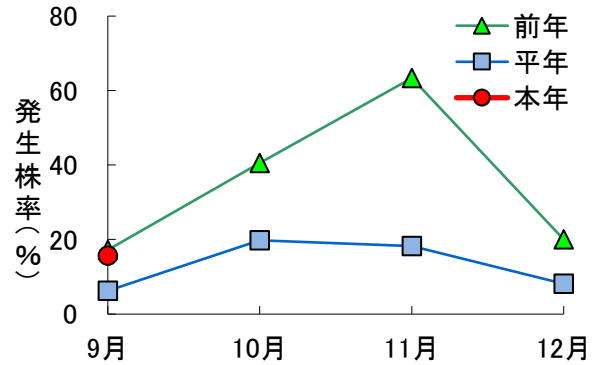


図1 コナジラミ類のキュウリでの発生推移

アスパラガス

[【概要に戻る】](#)

定期調査：8圃場
調査日：9月13～19日



定期調査圃場の様子

1. ハダニ類

1) 予報の内容
発生量：平年よりやや多い

2) 予報の根拠

(1)発生の現況

①定期調査(図1参照)

発生株率：1.9% (平年3.3%、前年0%)
平年比：並〈±〉

(2)10月の気象予報

気温は高く、多発生の条件〈+〉

3) 防除上注意すべき事項
(1)特記事項を参照。

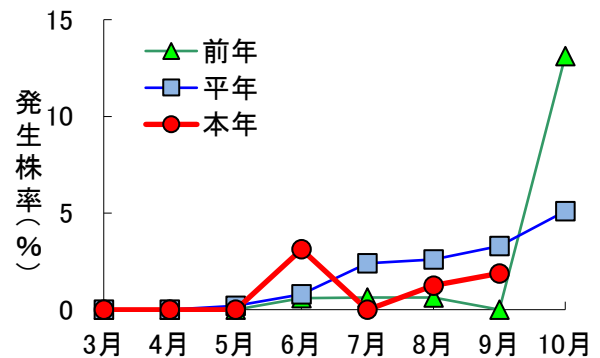


図1 アスパラガスでのハダニ類の発生推移

2. 褐斑病

1) 予報の内容
発生量：平年よりやや多い

2) 予報の根拠

(1)発生の現況

①定期調査(図1参照)

発生株率：60.0% (平年50.4%、前年55.6%)
平年比：並〈±〉

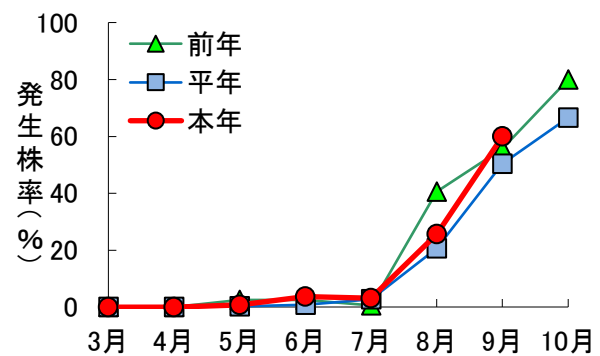


図1 アスパラガス褐斑病の発生推移

(2) 9月の気象条件

9月中旬の日照時間は平年より少なく、感染に好適な条件で経過した〈±〜+〉

(3) 10月の気象予報

降水量はやや少なく、やや少発生の条件〈-〜±〉

3) 防除上注意すべき事項

(1) 特記事項を参照。

野菜共通

[【概要に戻る】](#)

1. チョウ目害虫（ハスモンヨトウ、オオタバコガ、シロイチモジヨトウ）

1) 予報の内容

発生量：平年より多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査（図1, 2 参照）

作物名	食害株率(%)	平年比	平年値(%)	前年値(%)
イチゴ	0.5	並〈±〉	1.2	1.3
アスパラガス	0	並〈±〉	0.1	0.6

② フェロモントラップによるハスモンヨトウの9月の誘殺数は、平年より多い（図3）。〈+〉

③ フェロモントラップによるオオタバコガの9月の誘殺数は、平年よりやや少ない（図4）。〈-〜±〉

④ フェロモントラップによるシロイチモジヨトウの9月の誘殺数は、平年より多い（図5）。〈+〉

(2) 10月の気象予報

気温は高く、多発生の条件〈+〉

3) 防除上注意すべき事項

(1) 薬剤防除に当たっては、使用方法（収穫前日数等）を遵守し、虫体によくかかるよう丁寧に散布する。

(2) 発生種を確認し、薬剤を選択する。また、散布後は効果を確認する。

(3) その他は、特記事項を参照する。

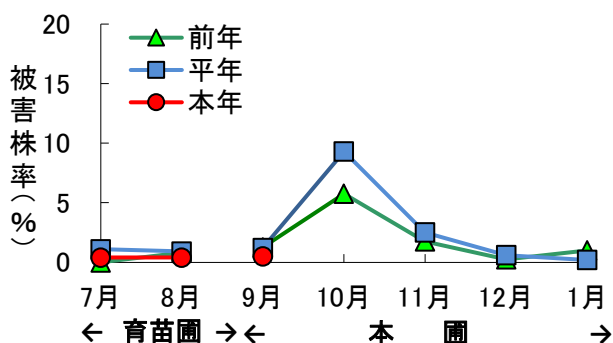


図1 チョウ目害虫によるイチゴの被害株率の推移

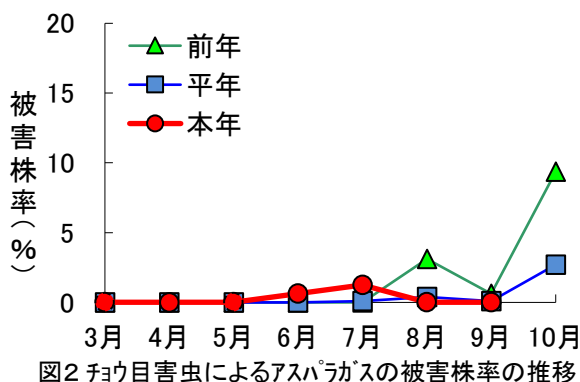


図2 チョウ目害虫によるアスパラガスの被害株率の推移

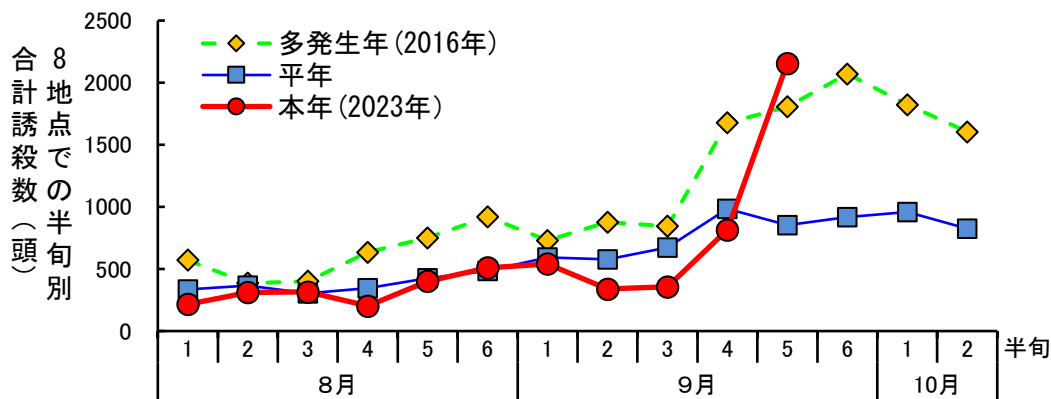


図3 フェロモントラップによるハスモンヨトウ雄成虫の半旬別誘殺数
(農業共済組合、農業試験研究センター調査による県内8地点の平均誘殺数)

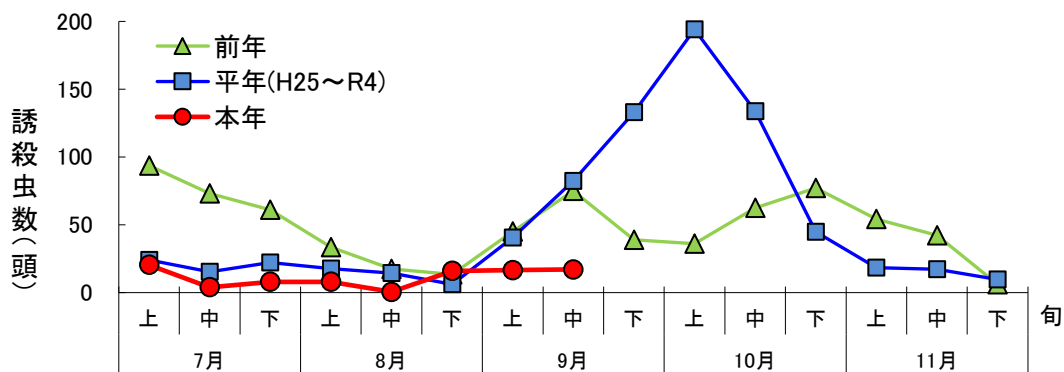


図4 フェロモントラップによるオオタバコガの誘殺数
(川副町2地点の平均: 病害虫防除員1地点、農業試験研究センター1地点)

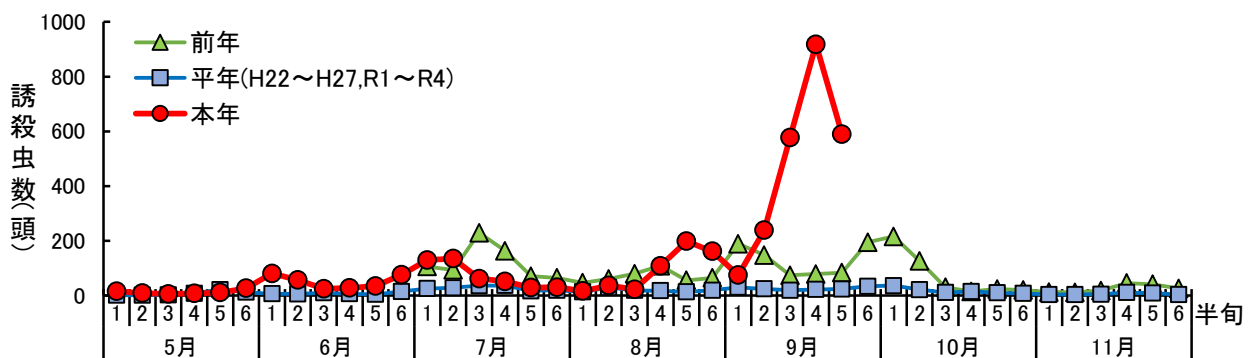


図5 フェロモントラップによるシロイチモジトウの半旬別誘殺数
(川副町・農業試験研究センター調査)

果樹全般

[【概要に戻る】](#)

1. カメムシ類

1) 予報の内容

発生量：平年より多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①予察灯 (図1 参照) 平年比：多〈+〉

②フェロモントラップ (図2 参照) 平年比：並〈±〉

(2) ヒノキ毬果における寄生数 (図3、表1 参照、9月14~20日調査)

成幼虫数平均：33.3頭 (平年12.6頭、前年14.5頭) 平年比：多〈+〉

- (3) ヒノキ毬果における口針鞘数 (図4、表1参照、9月14~20日調査)
 口針鞘数平均: 30.2本/果 (平年 20.9本、前年 21.2本) 平年比: 多 (+)
 (4) 10月の気象予報
 気温は高く、多発生の条件 (+)

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 特記事項を参照。

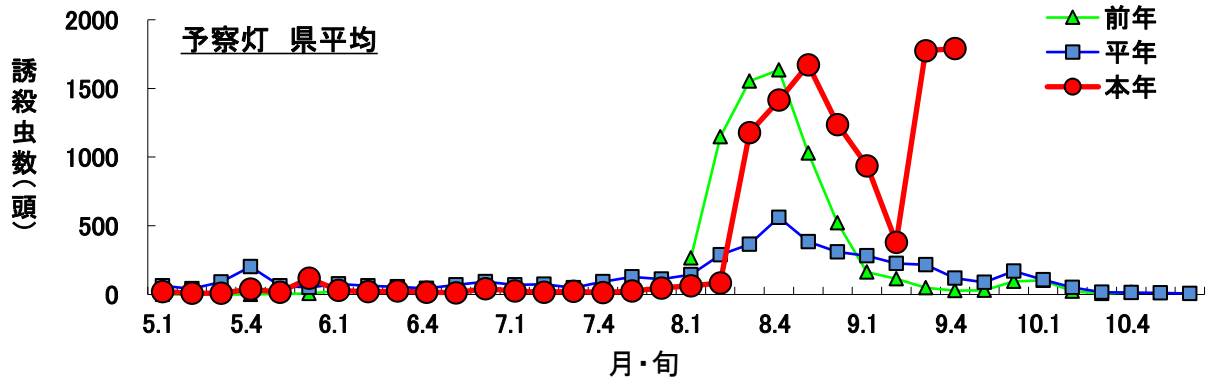


図1 予察灯 (佐賀市、小城市(果樹試験場調査)) による果樹カメムシ類の平均誘殺数の推移

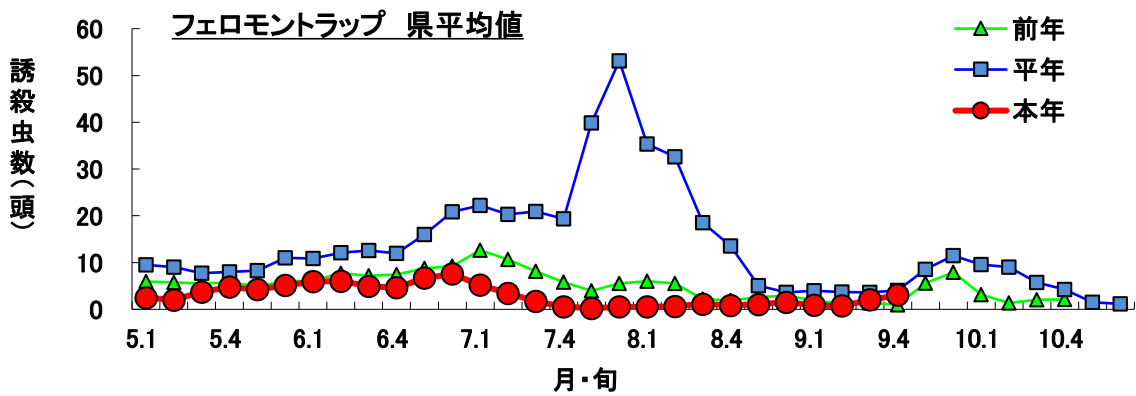


図2 フェロモントラップ (鹿島市、伊万里市、唐津市浜玉町、基山町、太良町(病害虫防除員調査)、小城市(果樹試験場調査)、唐津市鎮西町(上場営農センター調査)) による果樹カメムシ類の平均誘殺数の推移

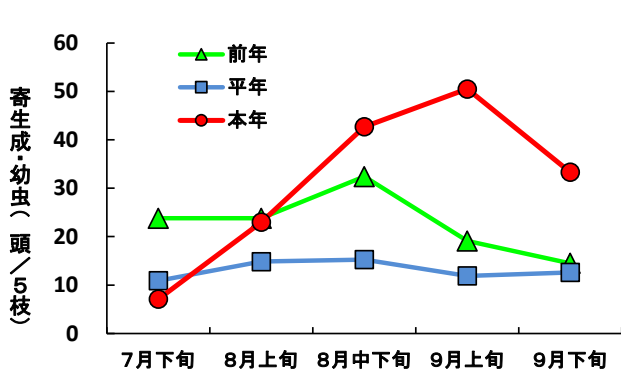


図3 ヒノキ毬果における果樹カメムシ類寄生数の推移

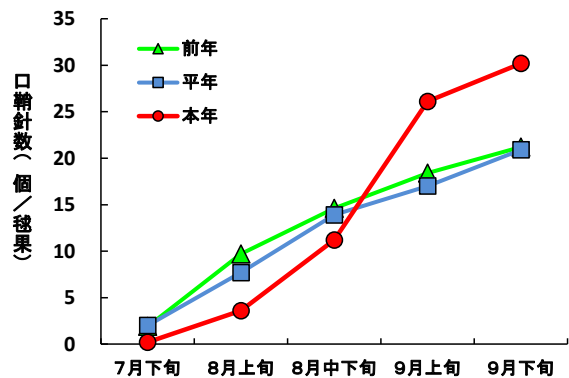


図4 果樹カメムシ類によるヒノキ毬果の口針鞘数の推移

表1 ヒノキ毬果における果樹カメムシ類の寄生虫数および口針鞘数（図3,4に関する地点別の状況）

No.	調査地点	寄生虫数															口針鞘数 ³⁾				
		7月下旬			8月上旬			8月中下旬			9月上旬			9月下旬			7月下旬	8月上旬	8月中下旬	9月上旬	9月下旬
		成虫	幼虫	合計	成虫	幼虫	合計	成虫	幼虫	合計	成虫	幼虫	合計	成虫	幼虫	合計					
1	上峰町	0	0	0	2	4	6	19	1	20	15	1	16	94	6	100	0.3	2.9	6.9	24.6	34.3
2	神崎市	1	4	5	3	6	9	7	31	38	18	0	18	16	10	26	0.6	1.5	4.5	29.7	45.5
3	小城市	0	0	0	8	5	13	39	0	39	32	1	33	11	4	15	0.1	3.9	8.8	21.2	15.9
4	唐津市1	12	4	16	42	9	51	11	7	18	18	4	22	34	4	38	0.2	2.9	24.2	16.2	32.1
5	唐津市2	2	0	2	1	1	2	40	3	43	20	0	20	13	0	13	0.1	0.2	12.2	17.8	32.5
6	唐津市3	4	0	4	33	1	34	21	119	140	102	8	110	15	26	41	0.0	2.9	16.5	24.0	26.7
7	伊万里市1	0	2	2	10	3	13	36	23	59	19	5	24	9	1	10	0.1	5.0	17.9	28.9	24.7
8	伊万里市2	4	3	7	9	61	70	35	6	41	13	2	15	15	0	15	0.2	2.4	15.3	26.1	34.0
9	伊万里市3	6	26	32	17	7	24	71	8	79	216	5	221	12	5	17	0.7	1.9	20.2	71.0	37.1
10	多久市	2	1	3	15	3	18	28	2	30	18	1	19	21	4	25	0.3	2.0	12.7	18.8	13.5
11	鹿島市1	7	7	14	5	2	7	14	11	25	32	7	39	37	0	37	0.1	1.0	2.9	23.4	11.8
12	鹿島市2	1	0	1	8	47	55	11	8	19	11	4	15	22	8	30	0.1	20.1	1.9	13.0	33.6
13	太良町1	4	8	12	0	0	0	16	10	26	11	80	91	5	30	35	0.1	0.5	5.6	21.0	35.9
14	太良町2	0	1	1	16	4	20	6	15	21	56	8	64	50	14	64	0.0	3.5	6.8	30.4	46.0
	平均	3.1	4.0	7.1	12.1	10.9	23.0	25.3	17.4	42.7	41.5	9.0	50.5	25.3	8.0	33.3	0.2	3.6	11.2	26.1	30.2
	平年	-	-	10.9	-	-	14.9	-	-	15.3	-	-	11.9	-	-	12.6	2.0	7.7	13.9	17.0	20.9
	前年(R4年)	-	-	23.8	-	-	23.8	-	-	32.4	-	-	19.1	-	-	14.5	1.9	9.7	14.6	18.4	21.2

- 1) たたき落としによる調査
 - 2) ヒノキ毬果着果程度：福岡農総試の遠観調査法に基づいて調査
 - ・極少：一部の木では丈夫にも毬果が見られるが、多くの木では上部にも毬果がない。
 - ・少：毬果が全くない木も見られるが、多くの木の上部には毬果がある
 - ・やや少：毬果が全くない木も見られるが、多くの木の上部には毬果があり、一部の木では中央部にもみられる
 - ・中：中央部まで毬果が見られる木が多い
 - ・やや多：多くの木では中央部までたくさんの毬果が見られ、一部は下部にも毬果がある
 - ・多：下部まで毬果が見られる木が多い
 - ・極多：ほとんどの木で下部までたくさんの毬果が見られる
 - 3) 口針鞘数が1果当たり25本を超えるとヒノキ毬果が餌として不適となりカメムシがヒノキ毬果より離脱する傾向
 - 4) 各調査日における口針鞘数から離脱予想時期(25本/果に達する時期)を推定
 - 5) 離脱予想時期の県平均は、各調査日および口針鞘数の平均値により算出
- ※ヒノキ毬果における寄生虫数、口針鞘数は地域等で差が大きいため、各地点の調査結果が必ずしも当該地域全体の状況を示すものではない。

カンキツ

[【概要に戻る】](#)

定期調査：8 圃場
調査日：9月20日～22日



定期調査圃場の様子

1. ミカンハダニ

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査（図1参照）

発生葉率：1.9%（平年1.1%、前年0.1%）

平年比：並（±）

(2) 10月の気象予報

気温は高く、降水量はやや少なく、多発生の条件（+）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 発生が見られる圃場、特に収穫まで期間のある

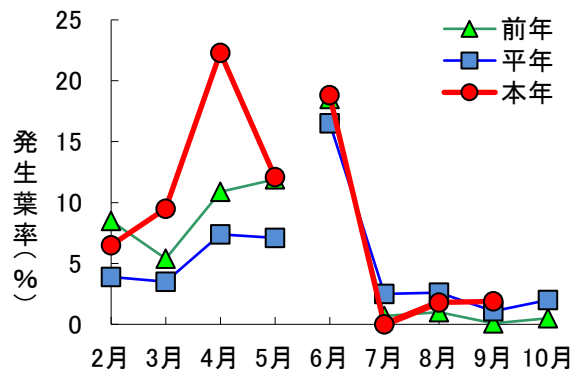


図1 カンキツ ミカンハダニの発生推移

晩生品種等では低密度時からの防除を徹底する。

(2) 殺ダニ剤に対する抵抗性の発達を避けるため、同じ系統の薬剤は年1回の使用とする。また、前年に使用した殺ダニ剤は使用しない。

キク

[【概要に戻る】](#)

定期調査：7圃場

調査日：9月14～20日



定期調査圃場の様子

1. アザミウマ類 (クダハアザミウマ、ミナキイロアザミウマ、ミカンキイロアザミウマ)

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少ない

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査 (図1 参照)

発生株率：0% (平年6.9%、前年0.9%)

平年比：少<->

(2) 10月の気象予報

気温は高く、多発生の条件<+>

3) 防除上注意すべき事項

(1) 発生状況をよく確認し、低密度からの防除を徹底する。本虫は、薬剤の到達しにくい葉裏などに寄生しているため、散布むらがないよう、十分量を丁寧に散布する。

(2) 圃場周辺の雑草は発生源となるため、除草を徹底する。

(3) ミカンキイロアザミウマは、キクえそ病 (TSWV)・茎えそ病 (CSNV) のウイルスを媒介する。発生株を認めた場合は速やかに取り除き、媒介虫の防除を徹底する。

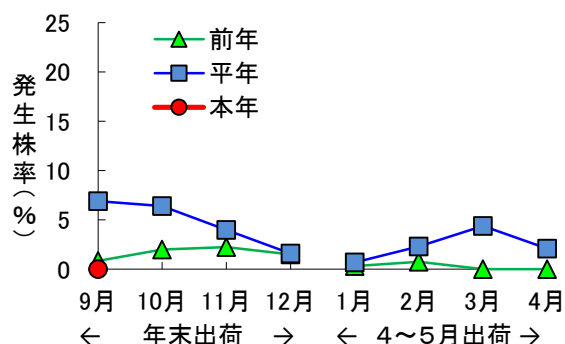


図1 アザミウマ類のキクでの発生推移

2. ハダニ類

1) 予報の内容

発生量：平年並

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査

発生株率：0% (平年0.7%、前年1.1%)

平年比：やや少<-±>

(2) 10月の気象予報

気温は高く、多発生の条件<+>

3) 防除上注意すべき事項

(1) 葉裏や下位葉にも薬剤が十分かかるよう散布する。

(2) 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。

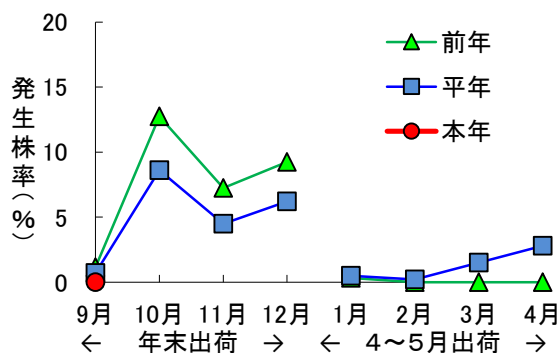


図1 ハダニ類のキクでの発生推移

3. チョウ目害虫（ハモンヨウ、材バコガ、シロイモジヨウ）

1) 予報の内容

発生量：平年より多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査(図1 参照)

被害株率：0.8%（平年0.7%、前年0.6%）

平年比：並（±）

② フェロモントラップによる誘殺数

野菜共通の項参照

(2) 10月の気象予報

気温は高く、多発生の条件（+）

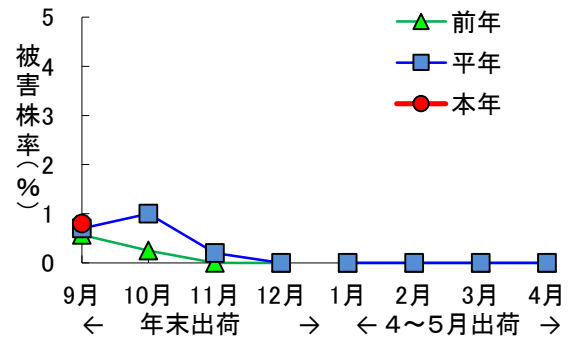


図1 チョウ目害虫によるキクでの被害株率の推移

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 発生程度は、圃場ごとに大きく異なるため、必ず圃場での発生状況を確認する。
- (2) 薬剤防除に当たっては、使用方法(収穫前日数等)を遵守し、虫体によくかかるよう丁寧に散布する。
- (3) 幼虫は、齢が進むと薬剤の防除効果が劣るため、若齢幼虫期に防除を行う。

連絡先：佐賀県農業技術防除センター 病害虫防除部

〒840-2205 佐賀市川副町南里 1088

TEL (0952) 45-8153 FAX (0952) 45-5085

Mail nougyougi.jutsu@pref.saga.lg.jp

ホームページアドレス <https://www.pref.saga.lg.jp/kiji00321899/index.html>

